ステンドグラス STAINED GLASS

新春恒例行事「新年名刺交換会」

毎年1月10日に開催されている「新年名刺交換会」。実際には名刺交換だけを目的とした集いではなく、慶應義塾で縁を結んだ先輩・後輩、友人、知己が世代を超えて一堂に会し、談笑のうちに新しい年を喜び合う行事だ。その始まりは福澤諭吉が亡くなって4年後のことだった。

会場に飾られる大鏡餅のもち米は大分・中津産

慶應義塾には、正月に塾長をはじめとする教職員、塾員、塾生などが三田キャンパスに集まり、互いに新年の挨拶を交わす「新年名刺交換会」という行事がある。現在は1月10日の「福澤先生誕生記念会」後に開催されており、一堂に会した面々が世代を超えて和やかに語り合いながら新年を賀している。

塾長と新年の挨拶を交わす塾生（2018年）

会場に飾られた大鏡餅（2018年）

新年名刺交換会の会場に飾られている大鏡餅のもち米は福澤諭吉の出身地である大分県・中津産を使用している。このもち米は中津三田会に所属する塾員佐藤正直君の寄贈によるもの。佐藤君の祖父である佐藤寅二は手広く米の産地問屋の商いを手がけ、1930（昭和5）年には初代中津市長として旧「福澤記念館」設立など地元出身の福澤諭吉の顕彰に尽力していた。寅二の長男（正直君の父）が慶應義塾高等部に入学した縁もあり、慶應義塾への感謝の気持ちを込めて中津産のもち米を送ったのが最初とされている。以来、3代にわたって佐藤家寄贈の米によって作られた大鏡餅が会場に飾られている。

午前中に西校舎ホールで開催される「福澤先生誕生記念会」閉会後、参加者は生協食堂へ移動。「新年名刺交換会」は塾歌斉唱、乾杯、そして若き血斉唱という式次第で開催され、毎年会場がいっぱいになるほどの来会者がつめかける。

第１回新年名刺交換会（1905 年）
写真提供：福澤研究センター

日露戦争の最中だった第1回「新年名刺交換会」

新年名刺交換会のベースとなったのは、福澤諭吉在世中から実施されていた新年の集いと考えられる。それがあらためて「新年名刺交換会」と銘打たれるようになったのは、福澤の死から4年経った１９０５（明治38）年の元日からだった。前年12月発行の『慶應義塾學報』に「慶應義塾新年名刺交換会発起人」名義で「相互ニ新正ヲ祝シ旧誼ヲ温ムルノ趣意ヲ以テ」開催する旨の告知広告が掲載されている。

その第1回新年名刺交換会の記録を見ると、午前9時から午後4時まで7時間にもわたって開催された。三色旗や紅白の幔幕（まんまく）を張り巡らした会場の正面には福澤諭吉像が掲げられ、左右には遺墨や書簡、義塾の記録のほか、福澤愛用の居合い刀、米つきの臼・杵などが展示されていた。大鏡餅はその前の教卓に鎮座。餅の手前には黒塗りの盆が置かれ、来会者は盆に自分の名刺を置いてから、福澤先生に一礼したという。また、来会者はフロックコート、シルクハット、羽織袴などの正装で、日露戦争中でもあり、号外で伝えられる大陸の戦況で大いに談論風発したようだ。会場で振る舞われたメニューは屠蘇、数の子、ごまめ、するめなど正月にふさわしいものだった。

福澤先生誕生記念会との同日開催から半世紀以上

第1回新年名刺交換会から55年後の１９６０（昭和35）年は、大学設置から70年、福澤先生生誕１２５年にあたる。当時の奥井復太郎塾長は新年名刺交換会の挨拶で「今後われわれが福澤先生に対して応える道は、慶應義塾をして真に最高学府としてふさわしい内容をもった大学にするため一層の努力をする以外にはないと信じます」と述べ、義塾関係者へ工学部（当時）や医学部の教育環境充実への協力を求めている。

長らく元日に開催されていた新年名刺交換会が1月10日となったのは１９６７（昭和42）年からである。

新年名刺交換会（1965 年）

当時の永澤邦男塾長名義で出された案内文には「……福澤先生誕生記念日にこの行事を併せ行なった方がより多数の方の参加を得て一層意義深いものになる……」と記されている。60年以上にわたって元日の行事として開催されてきた新年名刺交換会の日程変更には批判も少なからずあった。10年以上を経た１９７８（昭和53）年1月号の『三田評論』にも、「元旦に新年名刺交換会を」と題した塾員からの寄稿が掲載されている。しかし、すでに半世紀を経た現在では、1月10日に福澤先生誕生記念会と新年名刺交換会が併せて開催される日程が定着し、三田キャンパスの新年を象徴する行事となっている。